（十六）悔

延之助が拘引されてから二ヶ月、勘次郎は物思ひ勝てあつた。裁判所にも度々召喚されて、一時は連坐に逢ふなどとの噂も有つた位である、然し幸ひ勘次郎の身には悲なかつた。元來此の延之助の裁判には勘次郎は出來る丈を勉めたのである、辯護士の禮金丈でも少なからず費した。然し其も殆んど無効で第一審第二審共に同じく、三ヶ月の輕禁錮を宣告されて、已う上告も無益なとは見へ透てゐる。斯く延之助の有罪が殆んど確定してから、或夜勘次郎は更くるまで非常の物思に耽つて、其の明る日は芝の小谷家を訪れたのである。もう十二月も半過となつて、世間も何となく活氣を呈して來た。小谷重左衛門は友子が離縁と、幹雄が停學と、隅子の家から不相變無

心に來るのとで、先の短かい老衰の身を苦に憂れてゐる。が爰にせめてもの慰といふのは長孫の龍太郎が、多年の放蕩から眞人間に返つた事である。龍太郎は過ぐる七月中姉を欺き金を調達させたのであるが。姉は其爲めに離縁されたといふ事を聞傳へて、飜然として心を改めたのであつた。で今も矢張り大阪に勤めてゐるが、月々幾何かの金を送つて祖父と母親とを喜ばせてゐる。

さて勘次郎は高い閾を踏越して小谷の玄關に姿を現はすと、皆此を避けて取次ぐものも無かつた。兎も角も押して通ると、伯父重左衛門は其の面に唾も吐き懸け兼ねぬ氣色をしてゐる。が勘次郎は其も忍び此も忍ひ、漸く言葉を交へる丈の地位を許された。

上座に傲然と髯を撫げてゐるのは重左衛門、下座に頭を下げてゐるのは勘次郎である。今は痩せこけた老人が光を放なち、肥え太つた

若い方が中々に巻へきつてゐる。暫く語を切つた勘次郎は。

『到底も二度伯父さんの前には出られた譯では有ませんが、子故には迷うものです。雪枝が可哀相でなりませんから、尙う一度願つて見やうと顏押拭うて來たので御座います。』

と赭らんだ額の汗を押拭ふて語り續けた。老人は木て鼻を咬ひやう取つても付かず。

『其では何か。また幹雄に戻つて貰いたいといふ……、其は以ての外の事だ。』

『さう仰有やるのは御尤ですが。其處を先刻から重々御詫び申し居ますので。』

老人は忌々しく舌打して。

『途方もない勝手だ。人が有る間は無理に幹雄を追出して置て、無く成つたら又此を所望する。さう人を見結つてゐるから事が間違ふわい。』

『否えさう御解りに成つては、實に私の立瀬が有ません。全くの所惡氣も何も無かつたのですが、詰り私の考通りに世間が行かなかつたのです。然し其處が今考へて見れば尙且私の了簡損いでした。恁うなつては尙う一度幹雄を家に入れませんでは、甚麼も眠覺が惡う御座います。』

老人は冷かに嗤つて。

『餘り善い寢心も爲まい、自分の若い時の事を思つたら。ねえ、卿が若い時は甚麼だつた、其を忘れて了つて、一人前に成つて金を拵へたからといつて、此方の家に後足で砂を蹴懸けて逃げるといふ事は、先づ人間のする事では無いから。』

勘次郎は顔を背けて暫く齒を噛んでゐたが、腰を探つて煙管を取り出し一服して、徐ろに。

『全くさうした考でも無かつたですが、結果が同じですから、爰には餘計な事は申しますまい。が要するに私の我意が強かつたのです。若い時からの性質として、何でも自分の思ふ通りに行つて見たいのが病でした。其が今度といふ今度、間違つてゐることを全く覺つたのです。』

『さうさ、人は土偶の棒ではない、皆な夫々考を持つてゐるから。』

勘次郎は老人の冷罵の了るを待つて。

『幹雄の事は別れてゐますから判然ませんが、幹雄が歸りましてから雪枝が失望といつては無かつたのです、其から愈々養子を呼ぶ(自分らを嘲けるやうな語調で)とになりましてからは甚麽でしたらう。

結婚の晩は堪へきれないで、到頭卒倒しました……はあ卒倒して一時は危篤でした。』

と其後は感慨に堪へぬものゝ如く聲を失つた。漸くして又。

『其を私は一概に我慾だといつて、病に苦しんでゐる雪枝の頭から叱り付けました、能く死なぬかつた事と今では不思議な位です。』

老人は稍や耳を傾ける。

『子の可愛いのは誰も同じです。私は悟りが遲かつた丈に、今では雪枝に申譯がないやうな、いじらしいやうな、もう立つても坐てもゐられません。其にしても思ひ出すのは伯父さんの事です。此の二年の間、別して幹雄が學校を止めてから、伯父さんは甚麽御在り成さるかと。實際私は已う腸を斷つやうです。ねえ伯父さん、孫は子よりも可愛いと申して居ますが、別して父親の無い幹雄の事て

すもの……其が罪も無い――今から思ふと却つて擧むべき事です――其の罪もない事で追ひ戻されて、其から學問も止めねばならぬ事に成つては甚麽でせう。此う氣が付いて見ると、伯父さんには益々會はする顔が無くなる。無くなるが然し會はせんでは尙更義理が立たなくなるです。ねえ伯父さん、此處で御坐いますよ。是非私の願を叶へて今一度幹雄を戻して下さらないでは、はい眠豐が惡るいと申ますのは。』

と平生剛愎で有つた勘次郎が、弱りに弱つて情實を說くのが、實にいぢらしく見へた。で多年老人の胸に凝結つてゐた溜飲も自づと下つて、再び幹雄を遣らうと云ふ事に返事をして、勘次郎を返したのである。

斯くて老人は幹雄を勸めて再び林田家に歸らしめ、勘次郎は雪枝を

勵まして幹雄を迎へしめた。

（十七）松の内

雪枝は固より幹雄を迎うるに喜を以てした、然し其の喜の間には拭ふべからざる悲痛を含んでゐる。或時は病氣の早く癒つたことを恨み、又或時は父母に弄ばれたとを怒るのであるが、常時も到着するのは淋しい〳〵悲で、已う死んで了はうかと思つた事も度々である。けれど又一方に幹雄が同じ家の内に有るを見ては其も決し兼る。然かし幹雄は何故か昔しのやうに打ち解けない、常に生眞面目で、妙に言葉が改つて、以前の兄さん時代とは裏ら腹である。で雪枝は今は只だ、過去の幼なかつた時代を想像して、僅に生命を繋いでゐるのみである。

斯くて其年も暮れ世間は目出度春となつた。

『奥様は何故今晩、鎌田様に御行しやいませんでした。』

『歌骨牌も餘り面白くないからね。』

『でも奥様は大分御好でしたじや御座いませんか。オホ、去年なんぞは、御夜明し成すつた事も存じてゐますわ。』

『さうね。』

『已う大分賑やつてゐませう、屹度鎌田様でも變に思つてゐらつしやいますよ。』

『さうかも知れないね。』

『さうて御座いますともね、三度も御使が來た程ですもの。』

答は無くて淋しく笑ふのは雪枝で、此と對座して談話を爲てゐるのは小間使の花である。奥さまといひ小間使といつても、年は一つしか差はず、花は今年十八歳、丸顔の一寸愛のある女。

花は雪枝の顔を透して。

『奥様は此頃甚麼か爲てゐらつしやいますね。御正月に成つても羽子も御突き成らんじや有ませんか。』

『さうね。松の内も今日て御了だ、あゝあ。』

と思はず雪枝は嘆聲を發したが思ひ返して。

『花は愈々此の十六日には御歸りかい。』

『田舍からさう言つて參りますから。』

『大分馴染んだけれどもね。已う此處へ來てから一年餘になるだらう。』

『さうて御座いますとも。去年……已う明けましたから一昨年ですよ……參りましたのが八月で御座いましたから、九、十、十一、十二、さうて御座います一年と四ケ月。御早いもんですね。』

と花は何物かを想い浮べたやうに、洋燈の上に目を上げて、うつとり見るとも無しに瞶めてゐる。其の顔が如何にも無邪氣に見へるのて雪枝は微かに笑んて。

『嬉しいだらう。』

『あら奥様』とサと顔を染める。

『オホ、、早く歸りたいだらうね。』

花は一入顔を朱にし。

『奥様御人が惡い。何時御聞き遊ばして。』

『何時ても可いでは無いか。そして婚禮は今月の内かえ。』

恁う知れてはと、花も決心したのてゐらう。何時までも含羞んでは居らず。

『さういふ談て御座いますが。』

『猶り中野の村内かい。』

『つい近所の従兄弟で御座いますの。』

『フーン、其ては小い時から知り合つてゐたんだね。』

『其は已う兄妹同様にしてゐたので御座います。』

『さうかい、其ではまあ許嫁といつたやうなものだね。』

『まア那麼なもので御座いました。』

雪枝は人事とは思はれぬ。

『其てお前が東京に出てゐても、其の従兄の人は些つとも氣遣はないのだね。』

『へえ何て御座います。』

『否、えね、離れてゐても。お前が従兄の人を苦にしたり、又従兄の人がお前の心を疑ぐつたりするとは無いかい。』

『あら奥さま、ですから小い時からの馴染て、兄妹のやうに爲てゐたと申すのでは御座いませんか。』

此の男女の間には心と心とが相通つて、男には他の世界なく、女にも亦他に世界が無いと見える。雪枝は已う氣恥しいやうに。思はず。

『羨やましいとね。』

『あら奥様。奥様こそ結構な御身の上では御座いませんか。恁な立派な御家に御座つて。』

其まゝ雪枝は默して了つた。軈て十時も過ぎて冬の夜の十一時近くなつた。けれども幹雄は夕方に出たまゝ、歸つて來ないのてある。で雪枝は床を延させて、已う臥つて可いからと、花を去らしめたが。今夜に限つて幹雄の歸りが非常に遲く、其が又た平生に十倍して待たるゝ。

戸に當る風の音や、天井を走る鼠に欺かれて。殆んど自裂込んでゐると、門を敲くやうな音がする。雪枝は夢中で飛出し。幸ひ誰も起て來ないのを手柄のやうに、小門の鍵を外すと。凭れ懸つてゐもたのか、幹雄が仆れ込んだ。雪枝は驚きながらも確かと此を胸に抱き止め。

『危う御座いますよ』と扶け起したが平生に無く甚だ酒臭い。

幹雄は雪洞の灯にチラリと見て。何故か不満らしい顔をして。

『失禮。』

と身を飜へし敷石を玄關へ先に立つ。チラ〳〵と小い雪が何處からか迷つて落ちる。雪枝は先づ此を除所〳〵しく感じた。そして何だか突放でもされたやうに、直には續き得なかつたが、幹雄が又躓つて危うく仆れんとしたので。馳せよつて再び確かと抱き止めた。

幹雄は顧みて六ケ敷顔をしたが『ハ、、、』と高く笑つて、遂に内玄關を入つて了つた。

雪枝は勿論其の後に引添ふて灯を捧げて行くのである、幹雄が我が居間と反對の方向に進まうとするので。

『貴郎違いますよ』と突立つたまゝ雪洞を腥して氣を付けると。幹雄は踵を返して。

『ハ、、、全然り道が判らなく成つた。』

『此方で御座いますよ。』

と雪枝は手を添へて、遂に居間に導いた。幹雄は突き坐つて洋燈を避くるやうにして目を閉ちたまゝ。其かといつて居睡つてゐるでも無い。

雪枝は暫し手を付け兼ねてゐた、が軈て寄添ふて。

『御臥り成すつては如何です。』と羽織を脱がせやうとする。

幹雄は身を避けて。

『何に僕がする。』

と自ら脱き棄てた。然し帶は解かうともしないで、其まゝ其處に布て有る布團へコロリ、自ら引被いで了つた。

雪枝は何とも言へぬ嫌な〳〵感じがして。自ら涙ぐまるゝのである。

『御無理は無い事よ、此が二ヶ月早い事であつたら……まだ身體が全快しない時で有つたら、何とか分疏の仕やうも有たらうけれど。』

口の内で唸やいて、帶に手を挾み、腹の底から溜息を漏す。其顏は蒼さめ唇は色を失つてゐる。

『妾は何といふ運の惡い身だらう。初は無理に心を押へ付けて、何うか斯うか其の境界に居つかうとすると、彼の拘引沙汰。其から熟々人に連合ふのが嫌になつてゐる所に、二度目の結婚。那麼なに女といふものは心を替へて可いものであらうか。死る方が餘程樂だ。』

と自ら身杜寒くなつて來た。

『でも……、でも。』

雪枝は小供の時の歴史を想ひ浮べるのである。

稍〻有つて雪枝は思ひ出して、傍の雪洞を吹消し。夫の羽織を脱み屢〻躊躇して後夫の寢卷を取出した。寄り添ふて。

『貴郎氣味が惡いでせう。御着替に成ませんか。』

答は無い。

雪枝は其まゝ夫の寢卷を顏に押當てゝ泣入つた。幾時間を經たてあらう。雪枝は已う我身で我身が分らなくなつた。只だ呆然として座つてゐると。幹雄はむつくり身を起した。雪枝は遽てゝ。

『便所ですか』と洋燈を執つて立上る。

幹雄は此を拒むやうに。

『否や水を飲みに行くんだ。』

『あら水なれば此處に御座いますよ。』

と手早く傍の水差から滿々とコップに注で俯むる。顔背けてゐる幹雄も何樣やう眠つてはゐなかつたらしい。雪枝は少し身を進めて。

『貴郎。』

『……。』

『無ぞ輕薄な女だと思つてゐらつしやるでせうね。』

『フーン。』

と幹雄は鼻の先で待遇つて耳にも入れぬらしい。そして其まゝ褥に入らうとする。雪枝は堪へ兼て其の袖に縋り。

『何卒ぞ少つとの間起てゐて下さいまし。』

『眠いッ。』

と想氣なく言つたが、幹雄は流石に袖を振拂も出來ず引かるゝまゝ其處に坐つた。雪枝は俯向いたまゝ。

『あのう、無ぞ輕薄なものだと、思つてゐらつしやるでせう。』

幹雄は早下すむやう。

『自分もそう思つてるのか。』

幹雄は此家に來て已に一句、曾て雪枝に語を交へた事は無かつた。で黙るにせよ怒るにせよ、面と向つて雪枝の言葉に返事するのは、雪枝に取つて少なからず喜ばしい。

『はい私は、無ぞ早下んでゐらつしやるだらうと思つてゐます。』

『思つたつて仕樣が無いさ。』

『ですから御詫をしたいと存じまして。』

『何も謝るとは無いだらう。』

幹雄は努めて冷淡に言はんとしてゐる。

『否、え御座いまとも。』

『有つたら甚麼する、詫で消えると思つてるかい。』

忌々しさうに幹雄は言ふ。言はれて雪枝は地にも入りたき風情。

『はい』と泣き伏した。

『何だ馬鹿〳〵しい、恁な事に起されてゐて堪るものか』と幹雄は又褥に入らうとする。雪枝は再び引止めて。

『わの尚う少し。』

幹雄は舌鼓して又た腰を下した。

『妾は何故先の病氣で死な無かつたらうかと存じます。若し其時死んだらば、昔の兄さんを懐に持つて、安々と行く處にも行けたものをと、其が悔しう御座います。其から二度と御目には懸るまいと思つてゐましたのに、父が是非と申しますので。已う其時妾は何様にかする覺悟を極めてゐました。が又た、尚う一度貴郎に御會ひ申して御詫をしてからとの未練な心になりました。其から御顔を見ると又其の未練が強う成つて、今では甚麼しても御別れ申すとが出來なく成つたのです。此が女の淺猿しさでせう。』

堪へ難くなつて又泣伏した、幹雄は彌々と胸に應へて眼を閉ぢ手を拱いでゐる。

『でも今は貴郎の身で御座います、若し貴郎の御心が解けないで、死ねと仰有つたら見事に死んで御眼に懸けます。否、え其は喜んで死ぬるので御座います。が只だ一言、許すとさへ仰有つて下されば其

が本望です。其を聞ませぬ内は……。』

聲を放つて泣くのである。幹雄は身を堅くして動かぬ。雪枝は身を顏はし。

『ねえ。此てもまだ御心は解けませんか。』

幹雄は長き溜息を吐いた。其でもまだ一語も發しない。雪枝は手を幹雄の膝に懸けて押し動かした。親しげに。

『許して下さるでせう。』

（終り）

二年越

二年越奥附
定價金貳拾錢

明治三十六年八月十四日印刷
明治三十六年八月十七日發行

不許複製

著作者　溫亭主人
發行者　東京市京橋區日吉町四番地　渡邊爲藏
印刷者　東京市京橋區日吉町四番地　齋藤剛
印刷所　東京市京橋區日吉町四番地　民友社
發行所　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

民友社出版書籍目錄（明治廿六年七月改正）

（一）本社書籍は全國各賣捌店にて賣捌致候若し賣捌店に於て天災地變なくして賣捌かざる時は本社發送を怠るに非らずして其賣捌店に何等かの事故ありて發送を受け能はざるものと知らるべし

（二）斯る場合には本社へ前金を以て注文せらるれば必ず迅速に發送すべし

（三）注文は書名を明瞭に記送さるべし上、中、下又は第一第二等ある書籍は落ちなく之を記別せらるべし

（明治二十年二月創立）

東京市京橋區日吉町四番地

民友社

電話新橋二八五〇番

國民新聞第四千號附錄

千代のひかり

定價五十錢

郵稅四錢

右は天皇陛下御製　皇后陛下御歌を世にもめでたき久我從一位東久世樞密院副議長の筆蹟其儘精巧なる木版に彫刻し特別なる技術を以て上等美濃紙六十頁に印刷し製本為雅高尚にして眞に國民の一本を珍藏す可き稀品に候此の空前の冊子も當日のみにて其後需に應ずる能はざるは如何にも遺憾の至に付き早速再刊に著手致製本も出來致候に付緩々御注文被下度候

東京市京橋區日吉町四番地　國民新聞社

國民叢書

德富猪一郎著

◎近時二日
◎第三政
◎第日局
◎教曜曜
◎人講講
◎處史
◎日
◎生
◎社
◎世
◎漫

◎論壇
◎壇訓
◎評
◎言
◎壇
◎訓
◎世
◎物
◎間
◎記

郵定價二十五錢
郵定價二十五錢
郵定價二十五錢
郵定價二十五錢
郵定價二十五錢
郵定價二十五錢
郵定價二十五錢
郵定價二十五錢
郵定價二十五錢
郵定價二十五錢
郵定價二十五錢
郵定價二十五錢

◎文
◎寸
◎單
◎經
◎家
◎風
◎第
◎天
◎文
◎靜
◎青
◎人
◎進

學鐵漫
刀直入
二
世庭雲靜思漫
物思學然
年
乎と
退管餘斷と小小
歩教
歩餘

筆集錄策訓錄錄人片錄育見乎

郵定價二十五錢
郵定價二十五錢
郵定價二十五錢
郵定價二十五錢
郵定價二十五錢
郵定價二十五錢
郵定價二十五錢
郵定價二十五錢
郵定價二十五錢
郵定價二十五錢
郵定價二十五錢
郵定價二十五錢

蘇峰雜著

◎吉田松陰（肖像入）　郵税定價五十錢
◎新日本之青年　郵税定價四十錢
◎誕生日（德富猪一郎編纂　久保田米僊畫）　郵税定價二十五錢

蘆花生編著

◎青蘆の出と人生　郵税定價四十五錢
◎小説思出記　上製定價一圓六十五錢　郵税定價六十五錢
◎自然集　郵税定價二十五錢

◎小説不如奇異婦人の歸鑑
◎外交偵察
◎探偵
◎世界古今名山白雲
◎青山白雲
◎近世内外歴史の片影

櫻痴居士著

◎幕末政治家
◎懷往事談
◎幕府衰亡論

上製定價五十錢　郵税定價三十錢
上製定價三十錢　郵税定價二十錢
上製定價二十錢　郵税定價四十錢
上製定價二十錢　郵税定價四十錢
上製定價二十錢　郵税定價四十錢
上製定價二十錢　郵税定價四十錢
上製定價二十錢　郵税定價四十錢
上製定價二十錢　郵税定價四十錢
上製定價二十錢　郵税定價四十錢

時務叢書

◎海軍擴張と財政
◎國民と人物
◎時務論
◎新世紀二十三人十種論

家庭科學

第一編 動物の話
第二編 天文の話
第三編 植物の話
第四編 地文の話
第五編 鑛物の話

郵定價十五錢　郵定價十五錢
郵定價十五錢　郵定價十五錢
郵定價十五錢　郵定價十五錢
郵定價四十五錢　郵定價四十五錢

教育叢書

塚越停春著

◎第一卷 家庭夜話
◎第三卷 國民時勢
◎第四卷 地理人事
◎第五卷 風土人情
◎第六卷 時務と教育
◎第七卷 新國民の資格
◎第八卷 濟民の論
◎第九卷 婦人の海
◎第十卷 瀨戸內海
◎第十一卷 趣味の教育

郵定價八十錢　郵定價八十錢
郵定價五十錢　郵定價五十錢
郵定價十五錢　郵定價十五錢
郵定價二十錢　郵定價二十錢
郵定價四十錢　郵定價四十錢
（屬稿中）
（右同）
（右同）

◎第十二卷 富人論 （右同）

教育書類

◎實踐進德篇　柴田柴一郎著　郵定價四十錢

◎國民教育論　浮田和民著　郵定價四十錢

◎帝國主義と教育論　浮田和民著　郵定價二十五錢

◎成功　塚越芳太郎著　郵定價三十錢

◎立身　青山路愛山著　郵定價六十錢

◎修養　蘇國大學教授ウヨン、アツキー著　愛應義塾田中一貞譯　郵定價四十錢

論

式典書類

◎新式禮　士方白　田中子　愛應義塾　平田久編纂　郵定價四十五錢

◎內外交際

十二文豪

◎柿本人麿及其時代　塚越芳太郎著　郵定價四十五錢

◎エレー　湖田佳澄著　郵定價四十五錢

◎ロバイン　米田實著　郵定價四十五錢

◎ルソー　結方維嶽著　郵定價四十八錢

◎駅外ジョンソン　定價二十錢　郵税四十錢

◎第一卷カーライル　竹越與三郎著　定價四十八錢　郵税四十錢

◎第二卷マコウレー　山路彌吉著　定價四十八錢　郵税四十錢

◎第三卷荻生徂徠　宮崎八百吉著　定價四十八錢　郵税四十錢

◎第四卷ラルヅルス　高木伊作著　定價四十八錢　郵税四十錢

◎第五卷ゲーテ　北村門太郎著　定價四十八錢　郵税四十錢

◎第六卷エマルソン　塚越芳太郎著　定價四十八錢　郵税四十錢

◎第七卷近松門左衛門　山路彌吉著　定價四十八錢　郵税四十錢

◎第八卷新井白石　人見一太郎著　定價四十八錢　郵税四十錢

◎第九卷ユーゴー　德富健次郎著　定價六十錢　郵税三十錢

◎第十卷トルストイ　森田思軒遺著　德富蘇峰　山路愛山　校定　定價四十五錢　郵税二十錢

◎第十一卷賴山陽及其時代　塚越芳太郎著　定價八錢　郵税四錢

◎第十二卷瀧澤馬琴　定價六十錢　郵税五十錢

傳記類

◎王安石　吉田宇之助著　伊達模堂　千葉紫草　合著　定價六十五錢　郵税三十五錢

◎ゴルキー　定價四十五錢　郵税二十五錢

◎李鴻章　吉田勿來著　定價二十五錢　郵税十錢

◎濟民記　松方伯爵題辭　德富蘇峰序　吉田宇之助著　定價郵稅二十八錢

◎野中山　塚越停春樓主人著　定價郵稅四二十錢

◎西太后　中久喜信周著　定價郵稅二十錢

◎勝海舟　民友社編纂　定價郵稅六五十錢

◎熊澤蕃山　塚越芳太郎著　定價郵稅八十錢

◎將軍の半面（ヰルトケ將軍の文章及議論）　定價郵稅四二十五錢

◎森有禮　定價郵稅二十二錢

◎井原西鶴　幸田露伴序　角田柳作著　定價郵稅二十四錢

◎雲井龍雄　定價郵稅二十二錢

◎詩人行（口繪入）　定價郵稅二十三錢

◎阪本龍馬　弘松宣枝著（原字肯綮手蹟入）　定價郵稅十五錢

◎征清烈士　民友社編纂　郵第一二各十三錢

◎鐵道王　定價郵稅二十四錢

◎山縣有朋　附渡邊國武岡本柳之助　定價郵稅四十五錢

◎兩ケ有ト談　定價郵稅二十二錢

◎リコルド　定價郵稅二十二錢

◎子ソルド　定價郵稅二八錢

◎ウエリントン（下卷）　定價郵稅二十二錢

家庭叢書

◎吉田松陰文

◎第一卷 家庭の和　定價十錢　郵稅二十錢

◎第二卷 夏の家　定價十錢　郵稅二十錢

◎第三卷 玩具と遊　定價十錢　郵稅二十錢

◎第四卷 家庭教育　定價十錢　郵稅二十錢

◎第五卷 小兒養育　定價十錢　郵稅二十錢

◎第六卷 家庭衛生　定價十錢　郵稅二十錢

◎第七卷 家政整理　定價十錢　郵稅二十錢

◎第八卷 簡易料理　定價十錢　郵稅二十錢

娯樂書類

◎第九卷 社交と一人前　定價三十五錢　並製三十錢　上製四十錢　郵稅四錢

◎第十卷 婦人庭職　定價十錢　郵稅二錢

◎號外 家庭と家理　定價十錢　郵稅二錢

◎號外 名士と家政　定價十錢　郵稅二錢

◎號外 紫式部日記　定價十錢　郵稅二錢

◎號外 清少納言　定價十錢　郵稅二錢

◎守山恒太郎著 野球之友　定價三十錢　並製三十五錢　上製四十錢　郵稅四錢

◎名人小野五平編纂 將棋秘訣　定價三十錢　郵稅四錢

小說類

◎二年　溫亭生著
◎笑　千葉紫草著
◎荒　富永醉江生著
◎懺　山路愛山著
◎雪崩と百　富永醉江生稿　エリオット著『ロモラ』の梗概
◎不知火　溫亭主人作
◎第五國民小說　越魔磯悔合火　（近刊）（近刊）

文學書類

◎第六國民小說　定價四十五錢　郵稅四十五錢
◎第七國民小說　定價四十五錢　郵稅四十五錢
◎第八國民小說　定價四十五錢　郵稅四十五錢
◎惠　國木田獨歩著　磨　定價四錢　郵稅四錢
◎遜　定價四錢　郵稅四錢
◎武藏の書　定價四錢　郵稅四錢
◎日本文學簡　定價二十四錢　郵稅二十四錢
◎巢林子　定價四十錢　郵稅四十錢
◎名紀行　定價二十八錢　郵稅二十八錢
◎今世家名　定價二十錢　郵稅二十錢
◎ユーゴー文　森田思軒重譯　定價三十錢　郵稅三十錢
◎小品　野概曲選鈔　上下各　定價六十五錢　郵稅六十五錢

歴史類

◎懷舊　ヴヰクトル、ユーゴー著　森田思軒重譯　定價郵税　四十五錢

◎歸省　湖處子　宮崎八百吉著　定價郵税　四十五錢

◎新俳句　正岡子規君閲並序　下村爲山君選　高浜虚子君序　上原三川君選　河東碧梧桐君序　直野碧玲瓏君　共編　抱腹四季三十餘　定價郵税　三十五錢

◎一千金　歐文對照　定價郵税　二十六錢

◎一千金　定價郵税　二十二錢

◎語語　定價郵税　二十二錢

◎十九世紀史　野々村蔵舟著　定價郵税　三十四錢

◎十九世紀史　野々村蔵舟著　定價郵税　二十四錢

◎反動時代　定價郵税　二十四錢

世界國勢書類

◎史疑　瓜野（原士）成齋序　融軒村岡素一郎著　（德川家康事蹟）　定價郵税　二十五錢

◎讀史餘錄　山東塚越芳太郎著　定價郵税　四十錢

◎十九世紀外交史　平田久著　定價郵税　六十錢

◎內政外教衝突史　渡邊修次郎著　定價郵税　二十五錢

◎江戸と東京　三溪編　（西郷、大久保、勝三氏肖像入）　定價郵税　十二錢

◎歴史攻究法　（品切）　定價郵税　二十二錢

◎西亞細亞旅行記　兒玉源太郎總督序、後藤民政長官序、福島陸軍少將書簡　德富蘇峰序、家永豫吉著　（地圖及挿畫數種）　定價郵税　三十四錢

政法書類

◎露國政府編纂 日本民友社譯述
國事情
定價 郵稅 十二錢 六錢

◎露平田久著 西亞帝國
定價 郵稅 三十五錢 六十錢

◎支民友社編 那及列國
定價 郵稅 四十錢 二十錢

◎支國民新聞社編纂 那便覽
定價 郵稅 二十錢 二錢

◎朝柴四朗君、德富蘇峯君序、菊池謙譯著 鮮王國
定價 郵稅 八十錢 十錢

◎比民友社編纂 律賓群島
定價 郵稅 四十錢 八錢

◎已成西比利亞鐵道
定價 郵稅 二十錢 二錢

◎選學必携
ウエストレーキ原著 深井英五和譯
定價 郵稅 四十錢 二十錢

◎國際法要論
米國ローエル氏原著 民友社譯述
定價 郵稅 十一圓五十錢 十二圓五十錢

◎政府と政黨
深井英五譯
定價 郵稅 十二圓五十錢 八十錢

◎比較憲法論
英米佛
定價 郵稅 二十錢 十錢

◎支那憲法論
定價 郵稅 二十錢 二十錢

◎責任內閣
定價 郵稅 二十錢 二十錢

遺稿類

故楠井平四郎著 男楠井時雄編
◎小楠遺稿
上製 並製 郵稅
金一圓五十錢 金十圓六十錢

社會及經濟書

鳥井齋太郎著
◎資本の下し方　定價十五錢　郵稅四錢

小西孝太郎著
◎勤儉儲蓄のおしへ　定價二十五錢　郵稅四錢

平田農商務大臣及水内商工局長序
農商務省商事課長倉知鐵吉閲吉田虎雄著
◎支那貿易事情　定價壹圓四錢　郵稅十錢

米國文學博士東郷昌武著
◎トラスト論　定價二十錢　郵稅四錢

神坂鄜太郎著
◎經濟上の大阪　定價四十五錢　郵稅五錢

乾坤一布衣著
◎最暗黑之東京　定價二十三錢　郵稅二錢

英國ギッセンス原著　日本水上梅彦譯
◎英國産業史（上卷）　定價二十五錢　郵稅四錢

◎英國産業史（下卷）　定價四十五錢　郵稅五錢

◎世界經濟上の變動　定價二十錢　郵稅二錢

◎經濟と道德（品切）　定價二十錢　郵稅二錢

◎白皙人種の前途　定價二十錢　郵稅二錢

雜書類

◎育兒と衛生　定價二十錢　郵稅四錢

高橋二郎著
◎各國參照國勢調査法　定價三十錢　郵稅四錢

◎地理學小品　矢津昌永著　定價三十五錢　郵稅六錢

◎新聞記者の十年間　平田久著　定價五十錢　郵稅六錢

◎旅行日記　塚越停春・櫻主人編　定價上卅二錢　並十五錢　郵稅四錢

◎伊達騷動記　山路愛山著　定價二十二錢　郵稅四錢

◎歐洲見聞錄　人見一太郎著　定價三十五錢　郵稅四錢

◎況翁叢話　陸軍々財總監石黑忠悳男談話　定價二十五錢　郵稅四錢

◎東京市職員錄　東京市役所に於て調査(第二版)　定價壹圓　郵稅四六錢

◎娛樂倶樂部

◎事務世界

◎學問の應用

◎武備教育

◎技術

◎學校生涯

◎本朝美術

定價二十錢　郵稅二錢
定價二十錢　郵稅二錢
定價二十錢　郵稅二錢
定價二十錢　郵稅二錢
定價二十錢　郵稅二錢
定價二十錢　郵稅二錢
定價二十錢　郵稅二錢

明治廿二年二月創刊

國民新聞

國民新聞は日本國民の思想と生活とを代表する機關にして日本國民の一日も離る可らざる朋友也◎政治は不偏不黨◎紙面の全部に亘りて品格最も高し◎東京だより、日曜講壇共に國民新聞の特色也、主筆の手になるもの、東京だよりは世界の新聞を一目に見、日曜講壇は、處世の教訓を示す◎外交は其眞相を傳ふ◎北京京城の電報、通信は正確迅速他の及ばざる所◎財政と經濟、日本政府の棚卸と經濟社會の燈明臺とは本紙の自任する所也◎物價は詳細にして漏さず◎教育は本紙の本領にして教育界の大勢力也◎隔週附錄、政治經濟文學社會の精粹要報毎月貳回大版八頁◎其他家庭欄小說詩歌俳句碁將棋より樂術能狂言相撲演劇◎機樂の分子一も漏らす所なし

郵券貳錢五厘御送付あれば見本を呈す

定價
一ケ月 金壹拾五錢
三ケ月前拂 金壹圓
六ケ月前拂 金壹圓九拾五錢
一ケ年前拂 金參圓八拾五錢
郵稅 內地 一ケ月 金拾錢
朝鮮 一回 金四拾五錢
廣告料 特別面同 一行 金參拾錢

發行所 東京市京橋區日吉町四番地
電話新橋七〇《編輯用》新橋三八五〇《事務用》 國民新聞社

民友社書籍賣捌所

注意 (一) 此に列擧する賣捌店は本社直接に取引する店又は特別に記入申込ありし分に限る
(二) 故に全國に於て間接に賣捌かるゝ店は此他に多數ありと知らるべし

東京市神田區表神保町 上田屋
同 表神保町 東京堂
同 京橋區銀座四ノ六東 海堂
同 京橋區鎗屋町 北隆館合資會社
同 京橋區采女町 警醒社書店
同 日本橋區本石町 鶴屋喜右衛門
同 赤坂區青山南町 山陽堂
同 京橋區鎗屋町 良明堂
同 京橋區弓町 松邑孫吉
同 芝區三田四國町 小松原書店
同 赤坂一木町 山口書店
同 麴町區飯田町 神戸書店
同 麻布六本木町 北原書店
同 本郷巻木町 小杉商店
同 本郷四丁目 文明堂
同 本郷區巻木町 國光書房
同 同 文園堂
同 同區元富士町 田中書店
同 牛込區原町二丁目七二 關屋盈科堂
大阪市備後町 吉岡書店

大阪市北濱四丁目五十大國民新聞社出張所
同　備後町　岡島新聞舗
同心齋橋筋濱路町北へ入　中村正兵衛
同四條常安橋南詰四へ入　文德堂
京都市佛光寺通り　東枝律書房
同三條通富小路西へ入北側　便利堂
同　寺町通り　飯田信文堂
同　河原町　大黑屋
同二條通り河原町東へ入寶　文館
同　丸太町寺町西　前川書店
横濱市吉田町一丁目　第一有隣堂
同　伊勢佐木町　勉強堂書店
同　野毛町　第二有隣堂
神戸市元町五丁目　金海堂
吉岡支店

同市　元町五丁目三十四　石丸日東館
同　市元町一丁目　川瀨日進堂
名古屋市本町　川瀨代助
同　玉屋町　靜觀堂
廣島市塩屋町　積善館支店
同　東橋町　弘文館
東京府下八王子町　熊澤兼太郎
山城國向日町　須田正進堂
丹波國福知山柳町　足立攻城館
同　越山文進堂
大阪府豐能郡池田新町　鹽川豊翠館
丹波國柏原町　中井正吉
但馬豐岡町　由利安助
淡路國洲本町　成錦堂
越後水原町　西村六平
同　長岡裏四の町　黑目十郎

同　高田町　高橋書店
同　新發田町　萬松堂支店
同　桑田町　潤身堂
同　尼瀨　佐藤清三郎
新潟市古町通　北光社
長崎市野屋町　安中半三郎
同市　集榮堂
武州川越町　集成閣
武州兒玉町　中村文會堂
千葉町　大澤郁文堂
千葉縣長生郡茂原町　松本順一郎
水戸市櫛町　寺井文明堂
茨木縣水海道町　新々堂
茨城縣石岡町　民友堂
上州富岡　木田商店
上州原町　山口商店

上州桐生町　大出三泉堂
宇都宮市大工町　內山商店
野州足利町　三泉堂
伊賀國上野農人町　安屋勝次郎
伊勢國松坂　清玉堂
三州豊橋　宮田安一
遠州掛川町　澁文堂株式會社
靜岡市矢服町　內田書店
同　同　太陽堂
甲府市櫻町　四盛堂
大津市　文泉堂
近江長濱町　同支店
美濃大垣本町　渡邊商會
飛彈高山町　平田鈴吉
長野市　齋藤祥三郎

同　市　西澤喜太郎
同　市　信濃毎日新聞社
同市新田町　荻原朝陽館
信州上田町　西澤支店
同　野澤町　岩下新聞舗
同　岩村田町　文盛館
同　松本町　鶴林堂
同　町本町二丁目　慶林堂高美書店
同　洗馬　都筑文明堂
仙臺市國分町　佐勘書店
同　大町　木文書店
同　新傳馬町　但木芳次郎
福島縣福島町　漸進堂
同　同　鈴木萬助
同　白河町　奥村書店
同　白河町　石井書店
盛岡市　鶴鳴閣
陸中一ノ關大町　文港堂書店
青森市　鎌田書店
同　市　青港堂
弘前市　桂華堂
青森縣八ノ戸　伊吉商店
山形市　八文字書店
同市十日町四百二十六　荒井明治閣
秋田市茶町　成見清兵衛
同　市縣廳通　大島開成堂
羽後國増田町　東海林書店
同　大館町　越後屋虎五郎
同　酒田上中町　中村書店
若州小濱　吉岡昌太郎

福井市佐佳枝町　日新堂
同　品川書店
石川縣小松　宇都宮書店
金澤市　同支店
同　市　佐久間商店
能登飯田町　河内勇作
富山市東四十物町　中田書店
同　市　小林清重堂
高岡市寺山町　學海堂
越中川邊　弘文堂書店
鳥取市上魚町　山本吉太郎
同市智頭　藤谷旭日堂
同市東町八十八番地　久松堂書店
伯州倉吉　鳥飼榮藏
松江市　川岡清助
同　市天神町　大藍一年舍
岡山市弓之町百三番地邸周　營堂
同　市四大寺町　奥田金正堂
同　市丸亀町　吉原弘文堂
同　市上元町　本郷錢文堂
作州津山元魚町　横山萬竹堂
備中井原町　萩田書店
山口縣山口市中町　超世館
下ノ關市　山名書店
周防國岩國　白銀日新堂
和歌山市中橋地蔵　宮井宗兵衛支店
松山市　向井藏次郎
愛媛縣宇和島町　日進堂書店
同宇和島廣路通郡役所前　杉山靜清堂
高知市　開成舍

福岡市博多	積善館支店
同	眞海書店
同	森岡書店
筑前芦屋町	石松國吉
久留米市	菊竹金文堂
筑後國八女郡黒見村大字野田	成章堂
同 三池郡大牟田橋口町	上野書店
豊前中津町	野依暦三
豊前行橋町	高橋種成
大分縣大分町	甲斐治平
同	菅我堂
同 臼杵田町	高野菊三郎
佐賀市	大坪書店
熊本市新町	長崎文次郎
同 南新坪井町	好文堂
同 上通五丁目	中山知新堂
同 通町	石原書店
鹿兒島市	時昌堂
宮崎上町	修進堂書店
同 同	吉田幸兵衛
同 同	金光堂
北海道札幌南一條四丁目	谷村書店
同 南一條四三丁目	振堂
同 新聞賣捌合名會社	
同 小樽港	富貴堂
同 石狩國上川郡旭川	川南重助
同 一條通七丁目	旭書院
同 道十勝國帶廣大通七の十一	久富書店
秋田縣草花街十一番戸	小西日進堂
同 亀南草花街	龍泉堂
韓國仁川港	山岡書店

96
309

96
309

094838-000-1

96-309

二年越

温亭主人／著

M36

DBQ-2419